

# 幕末長州藩における海事志向の伝播

## —近代造船の先駆者・渡辺蒿蔵の人生から照射する—

牛見 真博

### はじめに

長州萩に生まれた渡辺蒿蔵（天野清三郎、1843-1939）は、15歳で吉田松陰が主宰する松下村塾に入門し、感化を受けた。志士としての活動を経た後は、幕末期に藩の海外留学生としてアメリカ、イギリスに渡り、造船を学んだ。帰国後は工部省に入り、官営長崎造船所第二代所長（後に長崎造船局となり初代局長）を務め、東洋一と称された立神ドックの建設に尽力するなど、我が国における近代造船業の端緒を拓いた人物である。

彼が志士として国事の奔走から造船分野へと身を転じた理由については、後に次のように述べている。

私は高杉、久坂其他の人の様な働きは出来ぬ、愚痴であつた。併し松陰先生が今後の日本は大いに造船、造艦の術を起して、航海遠略の基を立てねばならぬと話して居られた故、船大工なら私にも出来ようと思つて、慶応三年ロンドンに渡つた。これが船に関すること身に致すに至つた所以である<sup>1)</sup>。

この回想からは、当時の藩政との関わりは見えてこない。しかし、後述するように幕末期に長州藩から海外に渡った人々は限られており、渡辺がそれに選ばれたのも藩政との関わりから海外派遣の意義を認められたからに相違ない。

渡辺蒿蔵に関する先行研究もまた、彼のある程度の概略は伝えてくれるものの内容が断片的であつたり、前後関係や因果関係が省略されていたりして、とりわけ渡辺の藩内での立ち位置は掴みにくく、隔靴搔痒の感があることは否めない<sup>2)</sup>。これは渡辺の人物研究上の史料が限られていることにも起因している。

そこで本稿は、渡辺蒿蔵（天野清三郎）の基礎的研究として、松陰門下において志士から造船分野に進んだ経緯について焦点を当てつつ、師である吉田松陰をはじめとする幕末長州藩に色濃く存した海事志向に着目し、先行研究の空白部分を周辺事情によって埋めながらその人生を改めて追うことを意図するものである。

なお、本稿で用いる「海事志向」とは、航海や操船技術をはじめ、幕末に盛んになった日本を防禦するための方策としての造船、艦砲を含む海軍知識・技術の習得を目指すものとする。



図1 欧米留学中の渡辺蒿蔵  
（萩市立萩博物館蔵）

## 1 松下村塾時代

天野清三郎（後の渡辺蕎蔵）は、天保 14 年(1843)4 月 3 日、萩の川島の大組士渡辺茂助の三男として生まれた。幼くして天野駒太郎の養子となるが、安政 2 年（1855）、13 歳の時、養父の死に伴って天野家の家督を継いだ。復姓して渡辺蕎蔵を名乗るのは、明治 7 年（1874）のことになる。幼少時代は吉松塾に出入りしており、久坂玄瑞とはこの時分から親交が深かった<sup>3)</sup>。後の人生を方向づけた松下村塾への入門は、安政 4 年暮の 15 歳の時で有吉熊次郎に誘われている<sup>4)</sup>。また昭和 8 年の取材の際、自ら次のように述べている。

当時は松陰先生の評判がよく、誰も彼も松下に行つて居るといふやうで、云はば流行であつた、又松下村塾へ行けば、何か仕事にありつけると思つて居つたものだ<sup>5)</sup>。

塾では、有吉熊次郎や品川弥二郎、作間忠三郎（後の寺島忠三郎）らと仲が良かったようである<sup>6)</sup>。松陰が最初に天野について記しているのは、安政 5 年 6 月 19 日の江戸の久坂玄瑞宛書簡においてである。

近来の勉強家は岡部の外有吉熊次郎・木梨平之允等なり。中井の姪の由天野清三郎中々奇物、他人未だ深くは取らず、僕独り之れを愛す<sup>7)</sup>。

「奇物」という表現の真意は推測するしかないが、「他人未だ深くは取らず」からは、必ずしも誰かの目に留まる以前から、松陰は天野を見所ありと感じていたことが窺える。安政 5 年 12 月、野山獄で幽囚中の松陰は天野に次の詩を贈っている<sup>8)</sup>。

凜冽梅花埋雪中　凜冽たる梅花雪中に埋るも  
暗香馥郁遠相通　暗香馥郁として遠く相通ず  
他時果有探尋客　他時果して探尋の客あらば  
知是将来後起雄　知る是れ将来後起の雄

天野を「雪中」に埋もれる「梅花」になぞらえ、まだその能力は人の知るまでには至っていないが、よき指導者が現れれば、将来必ずや有望な人物になるであろう、と詠んでいる。天野の人生は、まさにこの松陰の漢詩の通りとなる点で示唆的な人物評である。ちなみに、天野が「後起雄」と呼ばれることがあるのは、この詩の結句の三文字に由来している。

松陰の期待に応えようとする天野の様子も窺え、「東坡策」を読了したことを松陰に報告している。それについて、安政 6 年正月 19 日、野山獄からの岡部富太郎宛書簡では、松陰もまた天野が「東坡策」を読破した様子を喜んでいる。

天野後起雄が東坡策読了し候所、同囚安富生是非写し取るとて汗水に成つて居る故、数日延引なり、全く忘却せず<sup>9)</sup>。

この時期、松陰は野山獄で老中間部詮勝の暗殺を計画するも、江戸にいる久坂や高杉らから時機尚早との諫言があり、他の門下生たちも賛同には至らず、憤懣やるかたなく胸中穏やかではなかった。そうした中で、年少の天野が「東坡策」

を読了したという報告は、松陰にとって一服の清涼となったのであろう。しかし、次第に門下生たちが敬遠していくのを察した松陰は、遂には絶食という行動に出る。その翌日（同月 27 日）に入江杉蔵宛書簡に天野の評価が見える。

天野は奇識あり、人を視ること蟲の如く、其の言語往々吾れをして驚服せしむ。誠に李卓吾の如きを得て之れを師とせしめば、一世の高人物たらんも、恐らくは遂に自ら是とし、其の非を知らずして死せん<sup>10)</sup>。

先にも松陰による天野の人物評として「奇物」語を見たが、ここでも「奇識」という語で評価されている。人とは違う視点からの優れた識見といった意味であろうか。人に対する観察眼に長け、その言葉によく驚かされることがあるとしており、優れた人物が師となればひとかどの人物になるはずだが、そうでなければ自分が正しいと思い込み、自らの非に気づかず無為のうちに一生を終えてしまうだろうという。このうち、「其の言語往々吾れをして驚服せしむ」とは、天野の次のような面を念頭に置いていたものと思われる。同年 2 月の松陰による高杉晋作宛書簡の一節に、次のように見える。

天野清三郎、此の生昨年已来一事も吾が説に同意せず。奇見異識他日必ず異人たらん。此の人深く老兄（高杉）に服す、其の他一人も服する人なし。僕遂に其の才を竭す能はず。足下幸に之れを心に記せよ<sup>11)</sup>。

この文面から、天野は必ずしも松陰の諸説に同意することなく、場合によっては自らの見解を率直に師にぶつけていたことが窺える。また、天野が唯一、晋作に対しては一目置いていることを伝え、その育成を託してもいる。

同じ時期、入江杉蔵との比較でも天野が登場している。間部要撃策の実行を期待していた入江も結局動かないことに対して、松陰は小田村に宛てて次のように綴っている。

僕子遠（入江杉蔵）を信ずること甚しきに過ぐ。……子遠も亦奴才、決して能く人を奴とする者に非ず。僕子遠を無逸（吉田栄太郎）の上に措く、惑へるを知り、悔ゆるを知るなり。天野生と無逸とは、識見遂に及ぶべからざるなり<sup>12)</sup>。

奴才とは、鈍才の意。つまり、入江に期待をかけたのは買いかぶりに過ぎず、天野清三郎や吉田栄太郎の識見には及ばないことが分かったという皮肉であるが、天野が引き合いに出され高く評価されている。同年 5 月 19 日、天野は松陰から巖子陵の詩を送られており、その跋には次のようにある。

右、巖子陵の詩、録して天野清三郎に示す。余嘗て子陵の志は天下第一流に在りしことを論ず。但だ鄧・桓諸人の為めに先鞭を著けられ、身其の下に立つを欲せず、枉げて加脚の一著を為せるのみ。清三は奇識あり、余因つて此れを示し、且つ曰く、子、宜しく子陵以上の人となるべしと。嗚呼、吾れ此れより去る、清三の後來果して何如を見ること能はざるなり<sup>13)</sup>。

後漢時代の巖子陵は、幼少から後の光武帝と共に学んだが、その即位後も帝との論議の後、足を帝の腹の上に置くなど友として対し、臣として仕えることをし

なかった。また、先に功名を立てた他の臣の下につくことも嫌がり結局隠棲した。つまり、松陰はかつて巖子陵について、清節の士としての志は一流と論じたが、どこまでも人の下につくことを嫌がった彼のようになっては結局能力を発揮できずに終わってしまうとして、ここでは諷刺の意をもって戒めている。

天野には、自己を是とする傾向があったことをすでに松陰の指摘で見えてきたが、彼が狭隘な見識や頑なな態度に凝り固まり、成長の芽を自身の手で摘み取ってしまうことを憂慮し、今後の人生に必要な姿勢を教示しているのである。これから死にゆく我が身は天野の将来を見届けることはできないためという吐露に師情が溢れている。従来書の中には、天野は勉強が非常に苦手で出来が悪かったという類のエピソードが見受けられるものもあるが<sup>14)</sup>、松陰直接の天野評からすれば、これらは後人による付会に過ぎないであろう。松陰による天野の人物評は、潜在的な能力は高いながらも、時に自己の才を過信し過ぎるところもある、といったところであろうか。

同年5月には江戸送りを控えた獄中の松陰を、同門の久保清太郎と見舞っていることが、入江杉蔵宛書簡に見える。

久保・天野来る。天野は吾が見る所恐らくは違はず。是れは高杉来帰を待ちて決すべし<sup>15)</sup>。

高杉が江戸から戻った際には、天野は私の遺志を継いで決起してくれるであろうという期待が窺える。天野は、松陰の江戸送りの際も見送っており、その様子を後に回顧して次のように述べている。

先生東送の時は、(安政6年5月)二十四日に品川(品川弥二郎)が呼びに来たから、すぐに参ったところが、先生のお母さんが仏壇に灯明をあげながら、無事に帰って来てくれ、といったのを聞いた、先生は何も云はなかった<sup>16)</sup>。

翌朝も見送り、「先生の後姿を門前で見送った時は、まことに感慨無量であつた」<sup>17)</sup>と回顧している。さらに、同年10月6日、死の20日前には、江戸獄中からの高杉晋作宛書簡に、松下村塾の塾生たちへの今後の期待や不安などについて綴っている。その中に天野の面倒を見てくれるようにと見える。

老兄深く顧みて呉れ給へ。天野少しく才を負み勉強せず、是れ惜しむべし<sup>18)</sup>。

親愛の情で目をかけられた天野は、松陰の死をどのように受け止めたのだろうか。それを今更明らかにすることはできないが、後の回顧で松陰から受けた教訓について、次のように語っていることから、天野のこの後の人生を追っていく上で示唆的である。

#### ・大正5年(74歳)

始めて先生に見え、教を乞ふものに対しては、必ず先づ何の為に学問をするかと問はる……先生の訓へて曰く、学者になつてはいかむ、人は実行が第一である……是の実行といふ言は、先生の常に口にする所なり<sup>19)</sup>。

・昭和 8 年（91 歳）

立志といふ事を云はれた。何でも人は仕事をしなければならぬ、と云はれた事を記憶して居る<sup>20)</sup>。

晩年までもなお強く残っていた記憶という点で、松陰の教えとしてその後の人生に深く宿った指針とも言うべきものが「立志」であり「実行」であったことを窺い知ることができる<sup>21)</sup>。

## 2 吉田松陰の海事意識

先に掲げた天野の後年の回想に、「松陰先生が今後の日本は大いに造船、造艦の術を起して、航海遠略の基を立てねばならぬと話して居られた」とあるように、彼が後に造船分野を志向する上で、大きな感化を果たした松陰の海事意識について具体的に触れておきたい。それはまた、後述する長州藩一少なくとも松門グループの海事志向を先導する役割を果たしたとも考えられるためである。

まず、松陰の海外認識が大きく変化する契機となったのが、初めての遊学となる嘉永 3 年（1850）の長崎行きである。同年 9 月 14 日、平戸に入った松陰は、まず葉山佐内のもとを訪れている。佐内の『辺備摘要』や、清の魏源がアヘン戦争の体験を記した『聖武記附録』を読んだ松陰は、西洋兵学や軍事技術に大きく目を開かされることになる。

しかしながら、それでも松陰の根本的な認識自体が改まったわけではなかったようである。10 月 2 日には、フランスの砲将ペキサンス（百幾撒私）の書を読み、その内容に対する私見を次のように記している。

大数の小船に此の砲を備へて、小数のリニー船と戦はんに、必ず大勝を得べきなり。故に海軍の船は甚だ大ならざるものを造るべし。又此くの如く小なれば、敵砲を避くるの一助となるなり。船小なるときは、之れを造る速かにして進退し易し、戦に於て大艦より勇にして捷便なり。其の船小にして惜しむに足らざればなり。その他濱汀に艤するを得、敗軍の時隠匿し易し。盆辨弾、皆的船を貫穿するを以て、之れを防拒するには重大なる船鎧を用ひざるを得ず。已に此くの如くなれば、水軍に於ては、皆剣を執りて決戦するに至るべし<sup>22)</sup>。

海戦においては多くの小船に砲を備えれば大勝でき、さらに小さい船のほうが敵の砲撃を避けたり、大艦よりも敏捷に動けたりするため、海軍の船は余り大きくないものを造るべきだとし、最後には剣で決すべしとあることは、この時点での松陰の意識の程度が窺えて興味深い。翌日には、同書の蒸気船の記述、翌々日には同じくペキサンス『台場電覧』といった書から、海岸砲台の高さや設置場所などについて書き記している<sup>23)</sup>。旧態依然の認識からまだ抜け出せていない点も見られるが、この長崎遊学を機に松陰は兵学者として西洋の軍事力や海防について多くを学び、伝統的兵学から西洋兵学を研究する転機となったことは確かである。翌嘉永 4 年（1851）、松陰は藩主毛利敬親に従い江戸に赴くが、そこで大

きな影響を受けることになる師・佐久間象山への入門といった具体的行動につながっている<sup>24)</sup>。

佐久間象山のもとで洋学を本格的に学びながらも、松陰のみでなく欧米列強の脅威が実際の強い危機感にまで高まるには、やはり実物との遭遇を待たねばならなかった。嘉永6年(1853)6月、浦賀沖に現れた黒船四隻のうち、とりわけ多くの砲を備えた二隻の強大な蒸気船の威容を目の当たりにした松陰の海事意識と現状に対する危機感の高まりは、ここに至り決定的なものになった。以後、我が国も同様に「堅艦」を造り、操練を盛んにしなければ自国を守ることはできないと考えるようになる。嘉永6年(1853)の「将及私言」では次のように述べている。

此の時に方りて堅艦の夷人を制するに足るものを製し、糧運に支りなく、又応援に便ある如くなさずんば、何を以て守りを為さんや。……或は蘭人に命じて艦を貢せしめ、又は工匠に命じて新たに製造し、並びに江戸及び各藩にて盛んに水操を興すことを許允ある如くあり度きことと、上は恐れ多くも天朝・幕府の御為め、下は六十六国生民の為に希願の心黙止し難く存じ奉る事あり<sup>25)</sup>。

西洋軍艦の実物に接見した衝撃の大きさは、後に松陰が「亜墨舶(アメリカ船)に乗り、海に出で五大州を周遊せんと欲す、事覚し捕せらる」<sup>26)</sup>と回顧するように、海外渡航へと強く駆り立てたが、嘉永7年(1854)に試みたペリー率いる黒船による密航計画は失敗し、国禁を犯した罪で萩の野山獄に入った。

松陰は、水戸藩の儒学会沢正史斎が尊王攘夷について記した『新論』に傾倒していたが、安政元年(1854)の入獄中に、兄杉梅太郎に宛てた書簡には次のように見える。

会沢の塩谷のと云うて新論の籌海私議のと云ふは高名なる著述なれども、其の当今下手守備の策は艦と砲とのみ。さあ大船官許ありたりと云ふ時、此の二人へ就いて軍艦は如何して作るものかと問うても其の作り方は知らず…吾が師象山則ち曰く、「……先づ蘭学を精研す、愈々精研すれば愈々隔靴搔痒、故に実地に行きて見る事方今の専要なり云々」と<sup>27)</sup>。

いざ尊王攘夷を唱えても、その理論の先頭に立つとされた会沢正史斎らも、造艦についての実学的な知識は有していないと指摘している。それまで傾倒していた二人の尊王攘夷の理論的著述に懐疑の目を向けて、西洋の「艦」や「砲」の実際の製造の可否を問題にし、師の佐久間象山の言を引いて、「実地に行きて見る」ことの重要性を綴っているところに、松陰の造船・造艦といった実学重視への意識の転換が見られる。

また、象山の次のような幕府への建白が受け入れられなかったことを承けて、松陰が密航を決意したことが、安政元年に同じく獄中で綴った「幽囚録」からうかがえる。

宜しく俊才巧思の士数十名を撰び、蘭船に付して海外にもだし、其の便宜を

して事に従い、以て艦を購わしむべし。則ち往返の間、海勢を識り、操舟に熟し、且つ万国の情形を知るを得ん。其の益を為す。因って竊かに建白する所有り。然れども官能く之を断行する無し。予航海之志、実に此に決す<sup>28)</sup>

さらに松陰は、安政5年(1858)の「続愚論」の中で、今後の海事人材育成のための振興策とも言ふべき建言を書き上げた。ここに至って松陰は、実際に「大艦」を製造し、多くの若者を「万国航海」させることによって、富国強兵策を立てることの必要性を明確に説いている。

一国に居付き候と天下に跋涉仕るとは人の智愚劳逸、近く日本内にても懸絶致し候事、況や四海に於てをや。何卒大艦打造、公卿より列侯以下、万国航海仕り、智見を開き、富国強兵の大策相立ち候様仕り度き事に御座候<sup>29)</sup>。

そして、小国でも海を渡ることによって国力を外に広げることが可能にする「航海の益」を指摘し、朝廷が自らその実行姿勢を示すために、京都に文武兼備の大学校を設立することを提案する。

外国の事情を知らずして徒らに海岸を守り貧窮に困しみ候は誠に失策に之れあるべく、英吉利・佛蘭西などの小国にてさへ、万里の遠海へ互り人を制し候は、皆々航海の益に御座候。此の所早く御着眼之れなく候ては竟東なく存じ奉り候事。天朝より勅諭を以て嚴重仰せ出され候へば、思召通り可なりには行はれ候筈には御座候へども、実は天朝より実事を以て御示し成されず候ては十分に参り兼ね申し候。右に付き差当り愚考仕り候は学校に御座候。京師に於て文武兼備の大学校御造建成させられ、上皇子皇孫より下齊民に至るまで、貴賤尊卑の隔なく寄寓仕らせ、文武講習を宗とし、天下の英雄豪傑を此の内へ聚め候様仕り度く存じ奉り候<sup>30)</sup>。

さらに、その大学校においては、「航海」で一学科を置き、二十歳前後の若者を船に通じさせるとともに、十代で志ある者も船に馴れさせて航海術を身につけさせよとする。また、オランダ船に託し毎年数十人ずつを近隣諸国に外航させることなどを通して数年内に我が国の航海術も盛んになるとした。

航海の事、一口に航海航海とのみ申し候へば、極めて成り難き事に相聞え候へども、是れを行ひ候は夫々順序之れある事に御座候。航海は一科の学に相成り居り候事に付き、学校中へ此の学所一局相建て、其の学に長じ候もの入学仕らせ候儀一説に御座候。又吾が国の航海、東北蝦夷・松前より西南対馬・琉球まで、自在に通船致し候事に候へども、只今の所にては専ら船頭舳子の事に成り果て候故、武家の士にても此の術を会得致し候もの之れなく、況して公卿の歴歴をや。夫れ故学校中にて人材を選び、二十左右少壯の者を諸国の港々へ遣はし通船に託し、海勢並びに船上の事心得させ、又志あるもの十歳左右の童兒をも丸に船頭に託し置き候事勝手に致させ、専ら其の術を精究致させ度く、是れ等も皆公卿より御引立成され候事、是れ二説に御座候。和蘭陀は二百年来航仕り候事にて、墨夷其の外新来の夷国とも違ひ、且つ往々御国の御為めを謀り候事に付き、此の船に託し壮士数十人ずつ年々広

東・爪哇（ジャワ）其の外へ御遣はし成され候事、是れ三説に御座候。此の三説を以て航海の基と成され候て、清国・朝鮮・印度杯の近国へ出掛け候様成され候はば、数年の内航海の事は大に行はれ申すべく存じ奉り候。此の条亦早く其の総督を定むるに在り<sup>31)</sup>。

朝廷の大学校構想として実現するには至っていないが、吉田松陰によるこれらの言論は<sup>32)</sup>、天野をはじめ松門の後進たちに海事へと目を開かせる大きな契機となったことは、後の彼らの行動からも確かであろう。

### 3 藩内の海事及び英学志向をめぐって

安政6年（1859）に松陰が刑死した後、天野は勤王志士として奔走し、高杉晋作や久坂玄瑞と行動を共にしている<sup>33)</sup>。

天野が造船分野へ進んだ契機としては、先に見た松陰による海事重視の感化の一方で、藩政の影響も看過できない。すなわち、桂小五郎、松島剛蔵、大村益次郎らによって整えられていく海事を含む藩内の洋学重視の風土である。松陰から直接海事志向の感化を受けた高杉や久坂、他ならぬ天野もまた、こうした風土も相まって少なからぬ影響を受けたと言えよう。

嘉永6年（1853）6月の黒船来航は、外圧の危機感を一気に高めた。同年9月には、幕府は寛永以来の大船建造の禁令を解き、諸藩に造船方法の調査などを命じた。その後、同年11月には長州藩は相州（相模湾）警備を命じられるとともに、翌安政元年（1854）2月には、幕府から大船を建造するように要請を受けたが、当時の逼迫した藩の財政事情や、そもそも建造経験すらない現状からは二の足を踏まざるを得なかった。

そうした中で、長州藩初の洋式船建造について計画段階から奔走し、大きな尽力をしたのは桂小五郎（木戸孝允）であった。桂は嘉永5年（1852）11月からの江戸での剣術修業の傍ら、安政元年に相州警備への出仕を命じられて以来、艦船の船体構造を実地で見分した経験を持つ中島三郎助を訪ね、安政2年7月からは彼に師事し、約半年間、自ら造船技術を学んでいる。この時期に、桂が吉田松陰に宛てた書の草稿には、造船に対する造詣が深い中島への弟子入りが叶い、藩の海事の先駆になろうとする堅固な意志を表明するとともに、日本人の手による造船という同じ方向性を見つめる松陰との情報共有に少なからぬ高揚感が感じられる。

私朔日ニ中島エ参リ三郎助ニ面会仕、悉細之趣談候処、引請振モ至而宜敷、彼ノ論ニモ何レ日本ニ而製造致シ候得バ、宜キ書ヲ得而研究致シ候ヨリ外ハ無之候事故、東条（英庵）モ参リ候ハズ、且而米ヨリ舶来致シ候製造書悉敷相調べ、雛形ヲ先ヅ造リ立候積リニ御座候故、一々是等之事申付候様申候、其中伊豆ニ而スクウネル製造有之候故、此方エモ遣シ候様申候、其故私モ中島エ寄食仕度由之处、引請モ至テ宜敷、二疊半程ノ鹽物固屋有之候故、座ヲ張呉候様申候、二三日中に込込相成候ト奉存候<sup>34)</sup>。



同年 11 月には、桂も戸田浦で建造なったスクーネル船（ヘダ号）について造船及び操縦の実際を視察し、造船に関わった船大工を藩に招聘し、独自の船艦製造を行うことを藩政府に建言している。彼による視察や実地体験、藩政府への建白などを通して、安政 3 年(1856)には藩主毛利敬親による洋式船建造命令につながった。これにより萩に恵美須ヶ鼻造船所が置かれ、安政 4 年（1857）、長州藩は初めての洋式船を完成させ、「丙辰丸」（47 トン）と名付けられた。全長約 25 メートル、幅 6 メートル余の二本マスト三枚帆の帆船である。



図 2 長州藩初の洋式船「丙辰丸」  
（山口県文書館蔵）

吉田松陰を海事の理論面での中心人物とすれば、その一番の理解者であり、現実路線で行動に移し、洋式船を実際の形として藩にもたらすことで、その後の藩内の海事志向を一気に広げた功労者は桂小五郎であったと言える。

第一次長崎直伝習生として、藩で最初にオランダ海軍士官に海事を直接学んだのは、西洋学所師範役であった松島剛蔵であり、その後の藩の海事を牽引していくことになる<sup>35)</sup>。安政 6 年（1859）3 月、松島は海軍の創設と遠洋航海実施の必要性について藩政府に意見書を提出している。しかし当時、丙辰丸は藩唯一の洋式船であったため、慎重を期して遠洋航海は許可を得られずにいた。そこで松島は、航海術を学んだ長崎直伝習生の帰藩を待った上で藩の許可を得て、同年 12 月には戸田亀之助を中心として、まず長崎・大坂への 100 日間にわたる長期航海訓練を実施した。さらに藩の要職に就いていた桂小五郎も松島の海軍振興策を支持し、万延元年(1860)4 月 10 日～6 月(日不詳)、丙辰丸による江戸への遠洋航海訓練が実施されることになった<sup>36)</sup>。

この長州藩にとって初めてとなる江戸への遠洋航海には、海軍教授方・松島剛蔵を長とし、長崎直伝習生の士分 4 人、定乗舸子 4 人、雇浦舸子 3 人、平郡舸子 8 人が乗り込み<sup>37)</sup>、これに江戸到着後は藩命により築地軍艦操練所で蒸気機関を学ぶことになっていた高杉晋作が加わった。高杉は前年（安政 6 年）には昌平黌で学んでいたが、久坂宛に「一身ニて致ス時ハ大軍艦ニ乗込、五大洲ヲ互易ス〔ル〕ヨリ外ナシ、夫故僕も近日より志ヲ変シ、軍艦之乗方、天文地理之術ニ志、早速軍艦製造場処ニ入込候ラハント落着仕居候」<sup>38)</sup>と書き送るなど、強い海事志向を有していた。高杉は、この江戸航海に際して記した「東帆録」の序文において「大丈夫生于宇宙間、何久事筆研」<sup>39)</sup>（大丈夫宇宙の間に生まれ、何ぞ久しく筆研に事へん）とまで海事に生きる気概を述べている。

当時 18 歳の天野清三郎は、「艦長松島に嘆願して一船員となつて乗り込み」<sup>40)</sup>とあり、この長州藩初の江戸航海に「舸子」として乗り込んだ。どのような経緯でそうなったのかを語ってくれる史料はないが、先に見た松陰の言に、「此の人

（天野）深く老兄（高杉）に服す、其の他一人も服する人なし」<sup>41)</sup>とまで言わしめた松門の先輩で、天野が心服していた4歳年上の高杉晋作の教唆といった線が濃厚であるように思われる。高杉もまた前年に亡くなった松陰の遺志を踏まえ、天野を気にかけていたことが窺える。まさに師松陰と、先輩高杉とのつながりが、後の人生につながる大きな契機となっている。

萩から下関海峡を経て、瀬戸内に航路をとり、紀州灘と遠州灘の風波で難渋した江戸航海は、陸路による通常の江戸行の3倍にもあたる約60日の日数を要した。当役の益田弾正は、この航海を次のように労っている。

数百里之海程ニ付、兵庫其外諸所ニて風波ニも逢候へ共程能相凌、殊ニ於遠江洋難風荒波ニて御船及危難候処、船頭舸子共え終夜諸事之駆引行届、御船無事ニ罷帰、遠海乗廻初て之儀旁不容易心配遂苦勞候段被聞召上、兼々心掛宜敷神妙被思召候<sup>42)</sup>

高杉自身は、江戸到着後には軍艦操練所入りを辞め、剣術修業名目の遊学に切り替えているが、丙辰丸に乗り込んだ天野にとって、藩の洋学を牽引する松島剛蔵や、高杉晋作と航海の苦難を共にしたことが、後に彼が造船の道に進む上において大きな影響を与えたことは疑いない。

さて、長州藩から海外に渡った人物に目を転じると、その多くが海外視察に加え、航海術あるいは海軍修業を目的としていたことが分かる。そこで、天野が丙辰丸での航海を経験した万延元年以降、藩から海外派遣および留学を経験した人々の動向を確認しておきたい<sup>43)</sup>。長州藩から初めて海外に渡ったのは、北条源蔵である。黒船来航時に藩から浦賀に派遣され視察を行い、その後安政2年に第一次長崎直伝習生として派遣された彼は、万延元年に幕府の第一回遣米使節の一行に加わり、藩における海外事情見聞の草分け的存在となるとともに、万延元年12月には海軍教授方に就任し<sup>44)</sup>、翌文久元年には庚申丸（丙辰丸に次ぐ長州藩2隻目の洋式軍艦）への乗組みを命じられている<sup>45)</sup>。

桂右衛門と山尾庸三は「航海術」と「船中の規則」「異域海路の形勢」の視察を目的として<sup>46)</sup>、文久元年（1861）2月10日、幕吏の北岡健三郎に随い亀田丸に乗り込み、露領アムール地方（黒竜江口）まで渡航している<sup>47)</sup>。しかし、当時幕府はまだ諸藩士の海外渡航を許しておらず、この周旋にあたったのが江戸有備館用掛だった桂小五郎である<sup>48)</sup>。とくに山尾庸三は、四歳年上の桂とは江戸の斎藤道場（練兵館）から旧知の間柄であり、山尾のロシア行に関しては郷里の近い村田蔵六（大村益次郎）も周旋に努めている。山尾はその後高杉、久坂、松島らによる御楯隊に加わり、松陰の遺骨の改葬でも高杉、伊藤らと行動を共にするなど<sup>49)</sup>、松門に近いグループにあり、海事志向についても共有していたことが窺える。同年3月の幕府による英仏両国派遣に際して、桂自身もまた一旦官を辞して欧州行の志を有していたが、周布政之助は国事多端を理由に斥けている<sup>50)</sup>。高杉晋作も同様の希望を有していたがこれも許されず、結果として杉徳輔（孫七郎）が「航海術修業」を目的に、外国奉行差遣を命ぜられ、文久2年1月、幕

府の遣欧使節に随行した。

文久2年(1862)7月には、外圧に対抗する幕政改革の一環で、諸大名にも海軍強化が奨励された。時を同じくして高杉晋作が、貿易視察を主目的とする幕府の千歳丸による上海視察に随行したことで、改めて内憂外患の危機意識を高めることになり、一人晋作のみならず、その後の長州藩の方向性にも大きな影響を与えることになったことは周知のとおりである。

同年、長州藩はイギリスのマセソン商会から最初の蒸気船「壬戌丸」(ランスフィールド号)を購入すると、山尾とロシア行を果たした桂右衛門を船長とするが、その乗員の求めに応じた中に志道聞多(井上馨)と遠藤謹助がいる。さらに、志道は操船に馴れていないことを理由に外国人を雇い教習を受けることを強く主張し、これに村田蔵六が賛同し実現している<sup>51)</sup>。また同年、第二次長崎直伝習生であった野村弥吉(井上勝)は、藩から函館での海軍修業を命じられている。周布政之助の手紙に、野村弥吉一同にも英学修業させるつもりであると見えることから<sup>52)</sup>、野村もまた将来の洋学の担い手として期待されていたことが窺える。翌年、藩政府は「癸亥丸」(ランリック号)を購入し、野村は船長、山尾は測量方として乗組み、江戸から兵庫へ曳航している。

文久3年(1863)5月12日には、志道聞多(井上馨)、野村弥吉(井上勝)、山尾庸三、伊藤俊輔(伊藤博文)、遠藤謹助の五人が藩主の承認を受け、海軍学習得のためイギリスへの密航留学に発っている<sup>53)</sup>。彼らがすでに何らかの形で航海に従事していた顔触れであること、また松門及び松門に近いグループであることに着目したい。さらに、海外渡航の必要性を強く感じていた桂は、ここでも彼らとともに留学することを欲していたが、やはり藩の要職にあることが足かせとなり留学を断念する一方で、同志の洋行を周旋することに徹している<sup>54)</sup>。欧米の実地で学ぶことは松陰の念願でもあったが、それが藩の政策として現実のものになり、桂はそれを藩政の立場に身を置きながら陰に陽に支援したことになる。

留学の主たる目的に海軍術の習得が掲げられていたことも、海事に通ずることが藩の活路を開くことにつながるという意識を伝えていよう。当の天野からしても、松門を含む近しい先輩格の人物を中心とする洋行の動向は、単なる点としての出来事ではなく、その延長線上に自らを置くことを意識させるのに十分であったと思われ、天野の海事志向や洋行への憧れを強く後押ししたものである。さらに、長州藩公認の洋行がイギリスを主体とするものであったことが、後の天野にも大きな影響を与えたことは確かである。この理由の一端として、藩内における英学重視の傾向も指摘できよう。

安政6年2月、久坂玄瑞は、藩の洋学の拠点である西洋学所(後の博習堂)への官費入舎を命ぜられ、7月には舎長に任じられた。同時期の彼の「九俣日記」には、「軍艦運用」「艦砲」「運転術」などの会業や、「軍艦大略」の模写、「海城大観」の閲読など、海事関係について多く記されている<sup>55)</sup>。この7月、8月にはすでに舎長として熱心に海事や兵学を学ぶ久坂を、天野も目の当たりにしていた

であろう。この後も、文久2年1月から3月にかけての天野と久坂の関わりには、「詩経会」参加（1月10日、2月5・10・15日）や訪問（1月26日、3月9・10日）、久坂の母の実家である生雲への同行（1月27～29日）、丙辰丸での2度目の江戸航海に発つ報告（3月7日）など、久坂との関わりの深さが日記から知られる<sup>56)</sup>。再び丙辰丸で江戸へ向かい、その後も久坂とともに上洛して謀議をこらすなど、二人が近い関係にあったことは、天野が後に西洋学所の後身である博習堂に入る契機としても強く影響したはずである。万延元年、久坂は「英学修業」のため江戸で学び、蕃書調所教授方の堀辰之助の影響もあり、洋学の中でもすでに英学が優勢であり、今最も気に掛けておくべき国はイギリスであると松下村塾門下の同志に書き送っている。

僕麻布御屋形（中屋敷）に罷在申候。毎暁卯牌より小川町蕃書調所教授方堀辰之助方へ通ひ申候、英学は未開、字書も乏敷候得は、少々困難は御座候。此度帰自米利幹者之咄にも、外国大抵英文行れ候由御座候、蛮書を読からしては英学便利之様被考候、今時可最慮者英吉利也<sup>57)</sup>

また、先に見た杉徳輔（文久2年幕府遣欧使節）による高杉晋作の父に宛てた報告も、次のようにイギリスの強大さを指摘している。

英国強大万国ニ秀出スルコト申迄モ無之候得共、武備諸工作場等ニ至ル迄殊之外盛ニ御座候、我神州ト雖モ二百年太平之弊風を守、因循ニ打過候而は併吞セラルモ難計候<sup>58)</sup>

国内事情を優先したために計画段階で終わっているが、後に慶応元年、高杉晋作が伊藤春輔（博文）とともに念願が叶い、「英学修業、時情探索」<sup>59)</sup>として、藩によりイギリス行きが認められていることも、藩政における積極的なイギリス重視を裏付けている。

この杉徳輔以後の長州藩からの海外留学組—文久3年：長州ファイブ、慶応元年：南貞助・山崎小三郎・竹田庸次郎、慶応3年：毛利親直・福原芳山・河瀬安四郎、慶応3年：河北俊弼・渡辺蕎蔵（渡航時アメリカ）—のほとんどがまずイギリスを目指したのは、こうした藩内におけるイギリス重視という機運の高まりも影響している。この選択が後の近代国家形成、特に工業化の面で大きな意義を有したことは、少し視点を変えれば、長州藩による海外情報の共有なり活用能力の高さを示しているとも

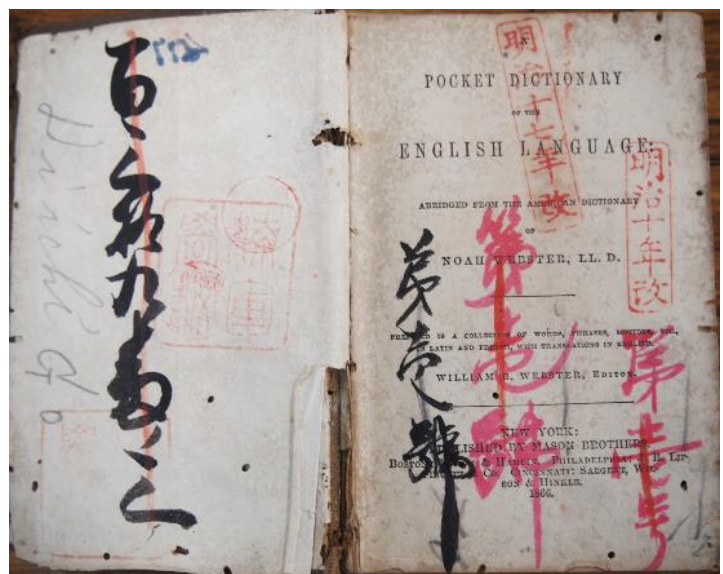


図3 英・ウェブスター辞典〈ポケット版〉  
※左頁の中央右寄りに「海軍学校」蔵書印



言えそうである。また、長州藩における英学に対する関心の高まりについては、寺田芳徳氏が藩の所蔵する洋書についての調査検討を通して、「文久年間に英学は明確な形で導入され、慶応年間には蘭学を凌駕して洋学の新しい主流となった」<sup>60)</sup>と指摘していることも挙げておきたい。その中心は海軍学校におけるものであり、自覚的に英学を取り入れた全国的にも早い例であったことが特筆される<sup>61)</sup>。

#### 4 海外留学に至る経緯

ここまで藩内における海事および英学志向を見てきたが、その上で慶応期の天野の海外留学に至る経緯について見ていきたい。

これも先行研究において天野の留学と当時の藩政との関わりについて説明するものではなく不明瞭なままである。そこで、留学に至る前段階として藩の動向に目を転じてみたい。攘夷期限となる文久3年（1863）5月10日、攘夷派の松島剛蔵と久坂玄瑞が主導し、下関海峡を通過するアメリカ商船に対して砲撃を加えた。同23日朝にはフランス軍艦キャンシャン号、同25日夜にはオランダ軍艦メデューサ号を砲撃した。この時、天野は久坂率いる光明寺党の一員として行動を共にしている<sup>62)</sup>。これらはいずれも庚申丸艦長の松島が、久坂ら光明寺党のメンバーと乗組んでの砲撃であった。松島と江戸航海を経験し、久坂と行動を共にしていた天野もまた、庚申丸に同乗して攘夷行動に加わっていたと考えるのが自然であろう。この後5月27日、久坂は攘夷の状況を幕府と朝廷に報告するため京へ派遣されている。



図4 庚申丸

（山口県文書館蔵）

しかしながら、6月1日にはアメリカ軍艦ワイオミング号による報復攻撃を受け、長州藩の所有する庚申丸、壬戌丸、癸亥丸は大破した。さらに5日にはフランス軍が下関に上陸し、前田・壇ノ浦砲台の占拠をはじめ多大な被害を被った。ここに至り、世子毛利定広の命もあり、高杉による奇兵隊が光明寺党を母体として創設された<sup>63)</sup>。こうした状況下で、天野（21歳）は光明寺党からの流れや高杉とのつながりもあってか、すでに同月には奇兵隊にいたことが「奇兵隊日記」から確認できる<sup>64)</sup>。翌7月には、高杉により「奇兵隊稽古掛」を拝命しており、その信任も相当に厚かったことが窺える<sup>65)</sup>。

ただし、その一週間後の7月20日には、「奇兵隊稽古掛」から、「勅使」の護衛の任に替わり<sup>66)</sup>、27日には京へ上っている<sup>67)</sup>。これには、京と国元とを往来しながら周旋を続ける久坂の支援といった意味もあったであろう。この時、上洛した中から選抜された天野は、10月には「狙撃隊」の「司令士」（中隊・小隊の

指揮官）として銃陣訓練を指導しているが<sup>68)</sup>、翌元治元年（1864）2月1日には「差除」されている<sup>69)</sup>。その後、2月10日に下関の奇兵隊本陣を訪れているが、その際の「奇兵隊日記」には、「天野清三郎来候事」、翌日には「山口へ行」と記されている<sup>70)</sup>。同日記は隊士が他所から帰陣した場合には「帰陣」と表現するが「来候」とあることから、やはり奇兵隊を離れて別の任を担っていたことが窺える。

同年7月19日に起こる禁門の変（蛤御門の変）前後の天野の動向について、後の回顧によれば、江戸にいた天野は加勢を頼む同志の檄に動かされて、一路東海道を下り京へ向かったが、近江の草津まで来たとき、久坂玄瑞や寺島忠三郎、来島又兵衛など多くの知己、友人の戦死、長州藩敗北の報を受けた。思案した天野は、今京に入り一命を取られるよりは、生きて君国に尽くすことを決め、他藩の藩士として船に乗ることを図り、命からがら長州へ戻ったというものであった<sup>71)</sup>。翌8月には、四国連合艦隊による報復攻撃により被害は甚大であった。そして、これにより長州藩は武力での攘夷に見切りをつける大きな転換点となった。

この8月の下関戦争以降の天野の動向は判然としない。12月の高杉晋作による功山寺挙兵にも加わっていた様子は窺えない。下関戦争で長州藩から全ての軍艦が失われたことにより藩の海軍構想が潰えたことも<sup>72)</sup>、天野の造船に対する思いを駆り立てたのかも知れない。また、この当時、藩の西洋学の拠点である博習堂で洋書をひもとく者は少なく、20名程度しかいなかった<sup>73)</sup>。師である松陰及び先輩同志の英学や海事志向を目の当たりにする中で、天野もまた海事を強く志向するようになり、この時期を境として、あるいはすでに将来的な洋行も志し、博習堂で学ぶに至ったものと思われる。博習堂はもともと萩明倫館に附置されていたが、元治元年7月17日の山口明倫館開校に伴い、山口に移っている。博習堂は文久元年以降、村田蔵六（大村益次郎）により教育課程、教育内容ともに整えられ、先進的な西洋兵学教育機関に発展していた時期であった<sup>74)</sup>。

文久3年の長州ファイブによるイギリスへの密航留学の実現（5月）、下関戦争での海軍艦船の喪失（6月）などをはじめ、翌元治元年の禁門の変といった長州藩をめぐる大きな動きの中で、松陰の説く「立志」と「実行」の具体的な対象を洋学、とりわけ海軍知識の摂取に自身の進路を見定めた末の選択であっただろう。天野自身の洋学や海事志向の高まりは、藩内の海外渡航の動向や、洋学振興の拠点づくりの具体的施策とも時期的に重なり、天野にとっては必然とも言うべく博習堂に身を置き、洋学のテキストを通しての海軍研究を行うことを求めたものと思われる。こうした一連の流れを踏まえれば、天野の博習堂入りは元治元年（1864年）、四国連合艦隊の報復攻撃で藩が艦船を全て失った8月以降であろう。

従来、天野は博習堂で語学を学んだとされてきている。それを当時の博習堂の教育形態に即してみると、天野は博習堂で「原書科」あるいは「訳書科」に籍を置いていたと考えられるが、蘭学ではなく、すでに英学の業本（テキスト）を通して海軍知識を学んでいた<sup>75)</sup>。具体的には、「兵学」、「海軍」、「海陸兼用砲術」

の各学科で構成され、海軍科は、さらに運用術と航海術に分かれ、その中で優秀な諸生に、庚申丸での実習を命じ、造船・運用・航海・艦砲のいずれかを専修するよう系統立てられていた<sup>76)</sup>。

慶応元年（1865）4月30日には、三田尻海軍学校が創設され、博習堂は附属の英学・蘭学の語学研究機関に位置づけられることになった。この改組は、海軍修業も英学・蘭学の書籍上からの知識が多いため、両機関が連携を取ることで、より双方の修業に資するとの理由からとされるが<sup>77)</sup>、さらには対幕府を視野に入れてのことでもあっただろう。実際、幕長戦争は一年後に起こっている。天野の回想によれば、慶応元年には山口の大村益次郎に就いて学んでいたが、その大村に「英語を勉強するなら、三田尻に行つて戸田亀之助に就て学ぶがよかろう」<sup>78)</sup>と勧められたとある。実際、同年7月21日付の伺書には、「右三兵学課塾入込被差除為英学修業海軍学校入込可被仰付哉」<sup>79)</sup>とあり、藩政上において、「英学修業」のために海軍学校への入所を命じられたことが分かる。三田尻海軍学校は、すでに創設時点から英学が主流であったことが指摘されており<sup>80)</sup>、英語の原書の教授を「英学拔群」とされた桂右衛門が担当していたことなど<sup>81)</sup>、大村の勧めもそうした状況を踏まえてのものであったと考えられる。

さらに言えば、海軍学校の創設に伴い、藩の軍事体制の中核を担う「艦隊長」「艦長等」となるべき候補を育成するために、大組の士から成る「干城隊」から入学者の人選をするよう達せられたことも関係していよう<sup>82)</sup>。すなわち、天野が藩政における人材として、どう捉えられていたかを押さえておきたい。先に見た大村の勧めというのは、「英語を勉強する」ためというよりもむしろ、藩の洋式海軍の先駆けであり重鎮であった松島剛蔵（元治元年12月に刑死）の構想を踏襲した海軍学校の創設にあたり、当時の長州藩海軍を率いる戸田亀之助の下で、より深く英学による海軍研究に励めという意味合いであっただろう。そのため海軍学校への移籍も、藩政の一環として大村や戸田による推挙があつてのことと理解するのが妥当と思われる。

当時の海軍学校は、初等（語学・製図・数学など基礎科目）・中等（造艦・航海・艦砲など専門科目）・上等（実地訓練）の三等級に分かれ、それぞれ3年間を修業期限としていた<sup>83)</sup>。ただし、すでに博習堂で学んでいた天野については必ずしもこの通りではなかったであろう。従来は後の本人の回想に重きが置かれ、博習堂で英語を学んだ後、海軍学校の英語教官になったと理解されてきている<sup>84)</sup>。しかし、これも文字通りに単に「英語」を教えたと取るよりも、「海事英語」と捉えるのが妥当であろう。すなわち、天野は海軍学校在籍時点で語学のみに専心していたのではなく、来るべき幕府との対決を控えた藩による海軍学校創設の意図からしても、海事専門科目や実地訓練にも従事していたはずだからである。

天野は先に見たように、松島剛蔵が率いた丙辰丸による長州藩初の江戸遠洋航海の一員であり、その後は高杉率いる奇兵隊稽古掛、さらには松島や久坂と攘夷活動を共にしてきたことは、藩内では周知の事実だったはずである。高杉におい

ても、奇兵隊など自らの目の届く場所を離れてでも天野の海軍研究への志を理解したのは、同じ松門の後輩で丙辰丸による江戸航海の同志でもあり、亡き松陰からも直接その行く末を託されていたこと、そして攘夷活動に見られるような胆力もある天野の海事志向が、将来の長州藩にとって大きな力になると思わせるだけの適性を彼が持っていたからと考えられる。当時、奇しくも大組に属する士分で天野のように海上・陸上の実地経験に通じ、博習堂で語学も修業した経歴を持つ者は珍しい。それだけに天野の存在感は大きかったはずであり、さらに博習堂と三田尻海軍学校との一体化という当時の藩政と関連づけて考えれば、天野が長州藩海軍の幹部候補として大村や戸田の目に映っていたことはごく自然なことに思われ、むしろ教官同様の人事で推挙され、さらなる教学修業にあたらせようとしたというのが実際のところではないだろうか。

翌慶応2年(1866)は幕長戦争を目前に控え、高杉晋作の独断契約を契機として蒸気船丙寅丸(オテント丸)が新たに海軍に加わり、さらに高杉は5月27日に「海軍御用掛」<sup>85)</sup>、開戦前日の6月6日には「海軍惣督」<sup>86)</sup>に任じられている。当時、長州藩が所有していた五隻の艦船は、乙丑丸(木造蒸気船300ト)、丙寅丸(鉄製蒸気船94ト)、癸亥丸(283ト)、丙辰丸(47ト)、庚申丸(ト数不明)で、後の三隻はいずれも砲を備えながらも木造帆船で、アメリカ製の最新艦である旗艦富士山丸(1,000ト)を擁する幕府との海軍力には大きな格差があった。

しかし、開戦前に高杉が前原一誠と「昨夜も御互に申候、従斯は海軍を主とし陸軍客と相成候形勢にて」<sup>87)</sup>とあるとおり、6月7日の開戦以降、久賀沖での丙寅丸による幕府軍艦への奇襲の成功にはじまり<sup>88)</sup>、6月17日に始まった小倉口の攻防では丙寅丸・癸亥丸・丙辰丸による田ノ浦での艦砲射撃、乙丑丸・庚申丸による門司浦での艦砲射撃によって長州藩兵の上陸を援護するなど、長州藩海軍は戦勝に大きく貢献した<sup>89)</sup>。史料的に海軍学校としての動向を記しているものは見当たらないが、実習艦を含め、当時藩所有の艦船を総動員していることから、高杉率いる海軍の一環として海軍学校も総力を挙げて参画したことは確かであり、天野も大いに働きを見せたはずである。それとの因果関係は定かでないものの、幕長戦争後、天野は海軍学校在籍僅かにして、同年中には教官に任じられている。その傍証となるのは、少年二人を入学させたい旨を教官の天野に伝える慶応3年(1867)正月の木戸の手紙である。また、追記に次のようにある。

……どふこふでも只英学修業相成候得は宜敷と申念願之由に御座候間此段御含奉願候山尾庸蔵など之近里に付逐々風を聞而發起候事と被存申候敬白<sup>90)</sup>

「どふこふでも只英学修業相成候得は宜敷と申念願之由」とあり、すでに天野は「英学修業」の強い希望を木戸に告げていたことが窺える。それに対する木戸の返答は、現在イギリスで造船を学んでいる山尾庸三などにも様子を聞いて実現させたいとあり、藩の重鎮であった木戸が後押しするだけの期待を担っていたことが窺え、天野はすでに海外派遣候補として十分目されていたのであろう。木戸



の周旋が大きかったと思われるが、その言葉どおり、天野（25 歳）は同年 7 月 22 日、同じ松陰門下の飯田吉次郎<sup>91)</sup>と留学の前段階と位置付けられる長崎への兵学修業を命じられている<sup>92)</sup>。イギリス留学を希望していた天野だったが、12 月には藩命により飯田はフランスへ、天野は松門晩年の弟子の一人である河北義次郎<sup>93)</sup>とともにアメリカへ渡り、その後、イギリスへ移って造船技術を学んだ。

## 5 留学時代

慶応 3 年（1867）12 月に発った天野曰く、米国へは堅固な蒸気船で 40 日程度の行程であったようである<sup>94)</sup>。まだパナマ運河の開通していない時代、アメリカへ渡る際の様子について、後に次のように回顧している。

地峡鉄道を利用して米国に行かうと思つて、駅に行つて、紙に旅行目的を書いて切符の交付を受けると、駅員が箱のやうなものを指して、あれに乗れ乗れと云つたので、指図のまゝに乗ると、その箱が動き出した、これは不思議なものだな！と思ふ間に、早や轟々として進行を始めた。臍の緒切つて始めて鉄道の切符を買つての汽車旅行だった<sup>95)</sup>。

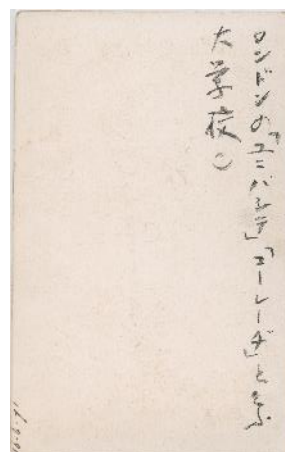
ボストンで 3 ヶ月ほどが経過した明治元年（1868）4 月、天野は河北と連名で藩政府に書簡を送り、当地での金策に困窮する様子と、ロンドンへの留学に変更したい希望を伝えている。

先便にも申上置候如く生等留学に付入費夥敷、……未た聾啞之身故恐らくは来秋迄位は独立之働は無覚束可有御座に付一卒之事竜動（ロンドン）に転じ可申哉と考え、先達而河瀬氏（河瀬真孝）迄彼之地入費之高、授学之二第（次第）等聞合せ之一封差送候得ども未だ返書を不得候間、……元来生等之志願は欧羅巴行に已然より御座候得ども、米利堅諸価下量にて相済候と申事枉て渡海候処、斯る二第にて何とも諸賢に申訳無御座当惑罷在候間、竜動は当地よりも下量に相済様之事に御座候はゞ明年よりは彼之地に転じ可申に付、何分之御指揮奉希候。……実に重々御配慮之至りに候得ども、生等入費当年分に対し一人に付未だ三百ドラ（ドル）不足に御座候間、兩人に付残り六百ドラ早々御送り方奉希候<sup>96)</sup>。

すなわち、アメリカは物価が高く出費がかさむが、未だ言語は通じず働くこともできないため、藩から仕送りをしてくれるよう頼んでいる。また、天野は当初からイギリス行きを希望していたが、アメリカの方が生活費は安価という藩政府の理由を挙げ、自らの希望に反する訪地だったことを述べている。すでにロンドンで学ぶ同じ長州出身の河瀬真孝<sup>97)</sup>にも書簡を送り、彼の地の様子を尋ねており、それについては返書待ちであるが、実際にはロンドンの方が生活費は安く、来年からはロンドンに移れるよう取り計らってほしいとしている。その願いが考慮されたのか、間もなく河瀬真孝の誘いでロンドンに移り、まず家庭教師を雇って勉強した後、明治 2 年にあたる 1869 年にロンドン大学ユニバーシティ・カレッジに入っている<sup>98)</sup>。



図5 留学中に渡辺が入手したロンドン大学写真



※ロンドンの「ユニバシテ」「コーレーヂ」といふ大学校

図6 写真裏面に残る渡辺のメモ  
(萩市立萩博物館蔵)

天野との関わりで着目したいのは、一足先に当大学で工学分野の習得を志した山尾庸三が履修した「土木工学」の科目である。担当は、W. ポール教授（英国学士院会員）で年間約 48 回の講義の概要（1864－65 年）については大学要覧から次のようであったことが分かっている<sup>99)</sup>。

- 1 序論
- 2 教育面
  - ・自然科学の工学への応用（数学、統計学、力学、流体静動学、水力学、気学、科学、地学、鉱山学）
  - ・工学素材の性質と特性
  - ・工学過程（製図、測量、水準測定、測定・計算）
- 3 記述面
  - ・工学の実際と業務一般（土壌と鉱石、基礎工事、建設過程、トンネル工事、石・煉瓦・鉄・木による橋造り）
  - ・工学の特定分野（鉄道、道路、内陸水路、河川、河口：港、防波堤、棧橋、ドック・倉庫：灯台：排水設備、灌漑、土地の埋め立て、水道設備：ガス設備など）
- 4 機械工学
  - ・鉄の構造、蒸気機関、機械装置、鉄船の造船、船舶工学、蒸気船の航行
- 5 工場視察
- 6 測量水準測定

内容は非常に多岐にわたるが、4にあるように、造船等の機械工学分野についても、この「土木工学」の科目で扱われていたことが分かる。造船業は工業技術が集約化したものと言われるように、山尾は造船を通して工業分野全般について習得したいという思いがあったものと思われる。山尾は翌 1866 年秋にマセソンの斡旋でグラスゴーへ移り、ネイピア造船所の職工になった<sup>100)</sup>。

1860～70年代、グラスゴーはイギリス第二の都市として、「大英帝国の工場」とも呼ばれ、鉄道や造船業で栄えていた。ネイピア造船所があったクライド川沿いだけでも30～40の造船所があり、なかでもネイピア造船所は、エンジンから船体まですべてを造る先端の一大造船所だった。また、ヨーロッパや中国からも徒弟工を受け入れ、働きながら造船について学べる造船の学校といった観があり、1860年代には、約1,500～2,000人がネイピア造船所で働き、そのうち2割はこうした徒弟工だったようである<sup>101)</sup>。

そうした当時の状況を考えると、ネイピア造船所という選択は日本人の山尾にとっても自然なことだったように思われるし、あるいはロンドン大学経由で適切な修業先として周旋があったのかも知れない。



図7 長州ファイブ（右下：山尾）  
（萩市立萩博物館蔵）

主に造船を通して工業技術全般を学んだ山尾は、その後、明治元年（1868）に帰国し、明治政府に出仕。同3年（1871）の工部省設立に尽力し、工学寮（後の工部大学校：東京大学工学部の前身）を発足させ、工業分野の人材育成に尽力することになる。後に、帰国した天野の工部省入省を勧めたのも山尾であった。

天野もまたロンドン大学ユニバーシティ・カレッジにおける一年間の在籍（〔Amano,S〕1869－70）が確認されているが<sup>102)</sup>、残念ながら天野の履修科目等の資料は明らかではない。ただ、天野は後に造船のみならず、「ドック」や「灯台」の設置に力を発揮していることから、恐らく山尾と同じ「土木工学」の科目を履修し学んだことが推察される。また、ユニバーシティ・カレッジ在学後は、グラスゴーの造船所で職工を務めたとされており、山尾が大学や造船所等との縁故を生かして、天野の修業先を周旋したことは想像に難くない。天野は、恐らくはネイピア造船所といった山尾と同様の環境に身を置いて修業に励んだと考えられ、この間に広く造船等の技術習得に努めたことは確かなようである<sup>103)</sup>。

明治5年（1872）10月には、欧米各国への視察と調査を目的とした岩倉遣欧使節団の全権副使として訪英した木戸孝允との再会を果たした。エジンバラには、かつて日本で公使を務めたパークスとも接見の機会があり、彼が「此处で鉄船の製造を修業しても、日本には鉄船がないから、寧ろ木造船をやっている亜米利加に行つて修業してはどうか」<sup>104)</sup>と助言したのを契機に、アメリカ行きの希望を持つようになる。

明治6年（1873）1月15日、木戸孝允に宛てた次の書簡からは、明治5年末頃には、それまでの造船所を辞めて、アメリカ行きの準備に取り掛かっていたことが分かる。

其節御高諭之如く、尚兼て申上置候米行一条に付、昨歳末切にて是まで居合

せ候造船局を去り当府へ参り、間なく渡海之覚悟に罷在候間…<sup>105)</sup>  
同月、木戸は次のように返答している。

過日御一書御投与拝見仕候弥御壮剛  
珍重々々御米行一条内実云々弟之存  
意を以寺島へも相談置候処同人もい  
細了承いたし居候間御目的相定候  
は、御渡米可然と奉存候乍去御落着  
之地は得と御詮議之上御発被成候方  
必上手段と奉存候左候而可成丈精々  
速に御調らへ御帰朝之处万禱仕候  
草々頓首<sup>106)</sup>



図 8 渡辺が留学中に収集した造船関係書  
(萩市立萩博物館蔵)

この書簡のとおり希望が叶いボストン  
造船所に移った天野だったが、同年 12  
月、従前に各藩から留学し、明治政府発足後もその延長線上で海外にいた当時の  
留学生たちは、発布後間もない「学制」に関わる留学制度の変更に伴い、すべて  
日本に召還されることになった<sup>107)</sup>。

## 6 長崎造船所時代

渡辺の帰国は、明治 6 年末～7 年初頭にあたる。帰国後は、山尾庸三の勧めで  
工部省に入省する。工部省としては近代国家を目指す重工業の拠点の一つである  
長崎造船所への現場責任者に、海外で先端の知識と技術を学んだ技術者を強く欲  
したのは言うまでもないことであつた。渡辺は、明治 7 年（1874）5 月 27 日に  
第二代所長として赴任した<sup>108)</sup>。これは、立神ドックの建設工事が始まる 10 日前  
であり、我が国最初の造船技師が責任者として配置され、今後の発展が託される  
ことになった。同年、渡辺が工部省に行った提  
案に対して、山尾庸三は書簡で次のように返信  
している。

此地（※工部省）ニ造船之事者相分り候者も  
無之事に付何も御見込之通り御取計被下度  
丸々御依頼仕候猶是後も右様御承知奉願上  
候<sup>109)</sup>

本省には造船について分かる者はないため、  
渡辺の判断に今後も全て任せるとの回答であり  
手放しとでも言うべき信任の厚さであつたこと  
が分かる。また、明治政府の重鎮となった木戸  
孝允からの信頼も厚く、船の精度について意見  
を求められるなど<sup>110)</sup>、斯界をリードする人材と  
目されていたことは疑う余地がない。また、当

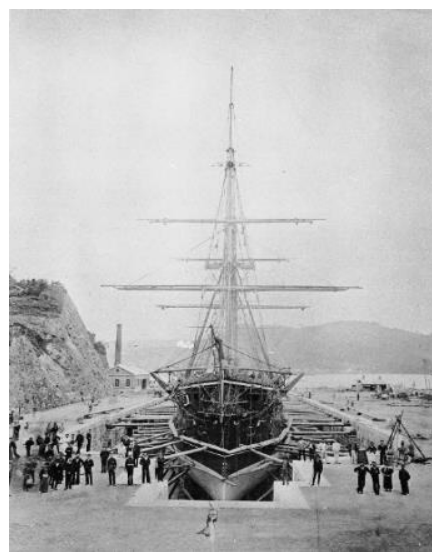


図 9 立神第一ドックとロシア軍艦  
(三菱重工業長崎造船所蔵) 明治 13 年



初の計画より約2年遅延したものの、明治12年(1879)5月21日、創業以来の懸案だった我が国最大にして、当時東洋一とも称された立神第一ドック(全長140尺、幅27,17尺、内部31尺、深さ10,4尺)が完成した。これにより、内航船のみならず外航船の入渠や新造船事業は一層進むことになった。

さらに同9年(1876)10月の起工から、じつに6年5ヶ月をかけて、16年(1883)2月には当時我が国の造船史上最大となる五番造船(木造汽船小菅丸:1496トン)が竣工した<sup>111)</sup>。これらの事業は、我が国の近代造船業の端緒を拓いた象徴とも言えるものである。

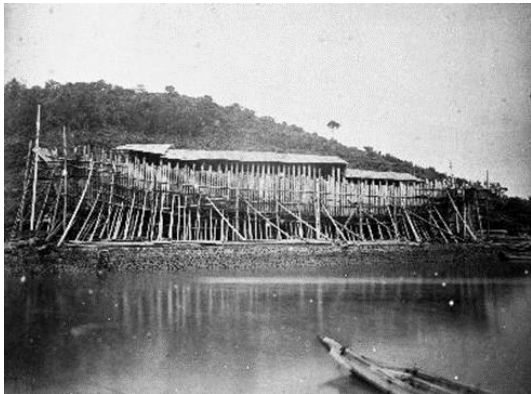


図10 建造中の小菅丸

(三菱重工業長崎造船所蔵) 明治14年

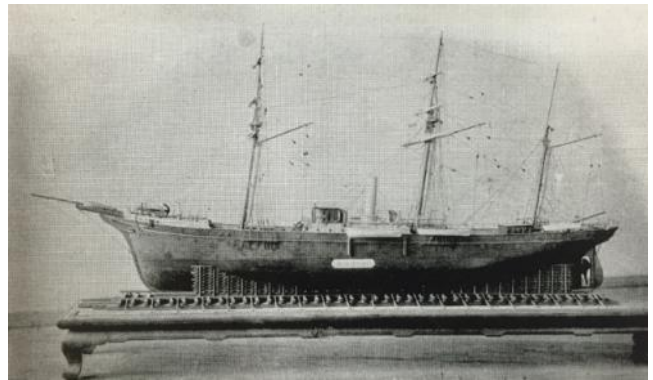


図11 小菅丸〈模型〉

(『船舶百年史前編』所収, 1957年, 有明書房)

明治16年(1883)9月、工部省直轄の長崎造船局になると渡辺はそのまま局長に就いた。しかしながら、現場の活況は<sup>112)</sup>、皮肉なことに必ずしも企業体としての経営の安定とは相容れなかった。時に明治15年以降、いわゆる松方財政のデフレ政策の余波を受けた不況による受注の途絶とともに、それまで必要以上の支出もやむなしとしてきた設備投資や原価管理体制などの内的要因も加わって一転経営困難に陥り、長崎造船局は結局払下げの方向で検討されるに至った。工部省による民間への貸与の発案を承け、明治17(1884)年7月には岩崎弥太郎による「郵便汽船三菱会社」に貸与し、その経営を委ねることになった<sup>113)</sup>。

## おわりに

明治17年7月、長崎造船局の三菱貸与後、渡辺は工部省の技師として出仕した。同じ松門の品川弥二郎の周旋もあり、逓信省の技師として横浜の灯台局兼務を命じられ、横浜港外に二基の大灯台を設置している。その後、明治19年(1886)には逓信省管船局所管の大阪及び神戸司検所長として船舶検査や航海免許発行等に従事した<sup>114)</sup>。港湾・船舶に関わる重要な任には違いないが、自他ともに認める造船技師であったはずの渡辺にとっては、必ずしもその意に沿うものではなかったかも知れない。その後、明治24年(1891)に49歳で萩へ帰郷<sup>115)</sup>。同志の遺品や松下村塾の保存などにも尽力しながら<sup>116)</sup>、松陰門下生最後の生き残りとして昭和14年(1939)まで生き、97歳の長寿を全うした。

以上、関係史料に基づき渡辺蒿蔵について追ってきたが、彼の人生は師である松陰、新政府のリーダーとなった木戸、久坂や高杉をはじめとする松門の先輩同志、松島や大村といった長州藩洋学の重鎮、ロンドン留学の先輩山尾といった人とのつながりに後押しされながら、松陰が常に説いていたという渡辺自身の「立志」と「実行」が加わり、いわば歩むべくして歩んだ人生であったように思われる。同志の遺品や松下村塾の保存に尽力したこともまた、そうした周囲に対する恩義を忘れない彼の人物を物語っているようにも思われる。

明治政府における重工業政策の重要な一端を担った官営期の長崎造船所にとって、天の配剤とも言うべき渡辺蒿蔵の尽力によって、日本の近代造船業の土台が築かれた功績は大きい。そして、その背景には幕末期長州藩における海事志向の強い伝播があったともみることができよう。

#### 註

- 1) 金子久一編『松陰門下の最後の生存者渡辺翁を語る：昭和十五年三月七日渡辺翁追憶座談会速記録』（以下、『渡辺翁』）（萩響海館,1940年）,86頁。
- 2) 渡辺蒿蔵については、従来、前掲『渡辺翁』、吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』（マツノ書店,1976年）、『吉田松陰全集』第10巻（大和書房,2012年）「関係人物略伝」（47頁）などを出典として語られることが多いが、断片的で全体像を知るには不十分である。また、「明治七年帰朝、工部省に入り、次いで大阪司検所長となる。後長崎造船所を創設し」（前掲「関係人物略伝」）、明治九年に至りて帰朝す」（前掲『増補近世防長人名辞典』）の波線部など、明らかな誤りも散見する。現在、彼の経歴をよく伝えるのは、海原徹氏による労作『松下村塾の人びと』（ミネルヴァ書房,1993年,132-134頁,267-270頁）及び『松下村塾の明治維新』（同上,1999年,255-262頁）である。ただし、二書の性格上、いずれも渡辺の専論ではないこともあり、また紙幅の関係もあると思われるが、種々の因果関係については必ずしも触れられてはいない。なお、同氏による近刊『最後の門下生渡辺蒿蔵が語る松下村塾』（萩ものがたりシリーズ 55,2017年）も「渡辺蒿蔵略歴」（5-15頁）として一章を割いているが、前掲二書をほぼ踏襲した内容である。
- 3) 『渡辺翁』金子久一自序。
- 4) 前掲『松下村塾の人びと』,132頁。
- 5) 『渡辺翁』,61頁。
- 6) 同上。
- 7) 『吉田松陰全集』（以下、『全集』）第8巻,64頁。
- 8) 『全集』第4巻,507頁。
- 9) 『全集』第8巻,194頁。
- 10) 『全集』第5巻,180-181頁。
- 11) 『全集』第8巻,229頁。
- 12) 同上,233-234頁。
- 13) 『全集』第9巻,554頁。

- 14) 岩橋文吉『人はなぜ勉強するのか—千秋の人吉田松陰—』（モラロジー研究所,2005 年）に、「松陰門下の奇才天野清三郎」（57-66 頁）として、彼の「立志」を称える文章がある。その中で天野清三郎の視点から、政治活動をするにも頭の働きが鈍く、臨機応変の処置ができず、勉強嫌いなため船大工を目指した、といった描かれ方をしている。伝記を語る上でのエピソードとしては面白いが、それが後の本人の回想を踏まえているとすれば、本人の謙遜も考慮すべきで必ずしも実像とは言えまい。しかしながら、同書の後人の著述への引用が増えるに従って、そうしたイメージが広がっていったものと思われる。
- 15)『全集』第 8 巻,356 頁。
- 16)『渡辺翁』,67 頁。
- 17)同上,49 頁。
- 18)『全集』第 8 巻,403 頁。
- 19)『渡辺翁』,72-73 頁。
- 20)同上,66 頁。
- 21)同様の内容として、今地延一氏の聞き書きに「書物を読んでも、読むばかりでは駄目だ、事業をやれと云はれました。事業と云つても金儲けの事業ではなくて、何か国家の為に具体的な事をやれと云はれよつた」（『渡辺翁』,54 頁）とある。
- 22)『全集』第 9 巻,72 頁。
- 23)同上,72-73 頁。
- 24)栗田尚弥「葉山佐内の思想に関する一考察—「思想家」吉田松陰誕生前史—」（『法学新法』第 121 巻第 9・10 号,2015 年）。
- 25)『全集』第 2 巻,17 頁。
- 26)『全集』第 9 巻,377 頁。
- 27)『全集』第 7 巻,310 頁。
- 28)『全集』第 1 巻,589-590 頁。
- 29)『全集』第 4 巻,348 頁。
- 30)同上,348-349 頁。
- 31)同上,349-350 頁。
- 32)長年、航海訓練所の帆船をはじめとした練習船で船員教育にあたり、現在、東京海洋大学教授の國枝佳明氏によれば、この松陰の言説は、航海学科の独立・早期教育・海外への実習航海といった点で、理に適ったものであるという。これらは当時のオランダ海軍の影響など、必ずしも松陰の独創とは限らないが、松陰の海軍人材育成に対する問題意識の高さや情報収集能力を裏付けるものであるとも言えよう。
- 33)『渡辺翁』,76-77 頁,80 頁。
- 34)『松菊木戸公伝』（明治書院,昭和 2 年）,37 頁。
- 35)小川亜弥子「松島剛蔵と洋学—長州藩洋学者が歩んだ尊王攘夷派への道—」（『洋学』23,2015 年）参照。
- 36)小川亜弥子『幕末期長州藩洋学史の研究』（思文閣出版,1998 年）,147-148 頁。
- 37)「丙辰丸製造沙汰控」（『山口県史』幕末維新 7,史料編,2001 年,860 頁）。

- 38)「安政 6 年 8 月 23 日久坂玄瑞あて」(「高杉晋作史料集」第一巻,マツノ書店,2002 年,70 頁)
- 39)「東帆録」(前掲『高杉晋作史料』第二巻,5 頁)。
- 40)『渡辺翁』,77 頁。
- 41)『全集』第 8 巻,229 頁。
- 42)前掲「丙辰丸製造沙汰控」(861 頁)。
- 43)三宅由紀子「幕末期長州藩の海外留学生」(『山口県地方史研究』第 85 号,2001 年)、及び山田裕輝「幕末期萩藩の海軍建設とその担い手」(『年報近現代史研究』9,2017 年) 参照。
- 44)「忠正公伝」第九編(25)(山口県文書館蔵)。
- 45)「艦船一件」二(山口県文書館蔵)。
- 46)前掲『松菊木戸公伝』,67 頁。
- 47)『修訂防長回天史』(マツノ書店,1991 年)第三編上,69-72 頁,及び第三編下,484 頁。
- 48)前掲『松菊木戸公伝』,66-67 頁。
- 49)兼清正徳『山尾庸三伝』(山尾庸三顕彰会発行,2003 年),19-31 頁。
- 50)前掲『松菊木戸公伝』,68 頁。
- 51)前掲『修訂防長回天史』第三編下,456 頁。
- 52)同上,541 頁。
- 53)いわゆる長州ファイブの留学に至る経緯やロンドンでの様子については、犬塚孝明『密航留学生たちの明治維新一井上馨と幕末藩士』(日本放送出版協会,2001 年)、同『一ヴィクトリア朝英国の化学者と近代日本ーアレキサンダー・ウィリアム・ウィリアムソン伝』(海鳥社,2015 年) 参照。
- 54)彼の日記に次のような回顧が見られる。「夕刻山尾庸蔵井上弥吉来る……余与彼等遠遊の約あり于時余係官依て余断然相留彼をして令遠遊」:明治元年 11 月 21 日(『木戸孝允日記』一,東京大学出版会,1967 年,145 頁)、「英人カールに面会すカールは攘夷の已前井上伊藤山尾等と洋行を陰に彼に謀る彼一諾任其事而して余其時已に在官義不能洋行井上諸子と訣別して諸子を促して洋行せしむ」:明治 2 年 5 月 17 日(前掲『木戸孝允日記』,224 頁)。
- 55)「九俣日記」(『久坂玄瑞全集』,マツノ書店,1992 年,238-239 頁)。
- 56)「江月齋日乗」(前掲『久坂玄瑞全集』,289-303 頁)。
- 57)「佐世八十入江子遠宛書簡」(前掲『久坂玄瑞全集』,482-485 頁)。
- 58)前掲「忠正公伝」第十二編(3)。
- 59)前掲『高杉晋作史料』第一巻,284 頁。
- 60)寺田芳徳『日本英学発達史の基礎研究』下巻(溪水社,1998 年)「第 6 章長州萩藩における英学発達過程と三田尻海軍学校の成立」,519 頁。
- 61)寺田前掲書に、「三田尻の『海軍学校』は、幕府が安政 2 年(1855)に長崎に開設した海軍伝習所、また安政 5 年(1858)に同じ長崎において発足した『英語伝習所』に次ぐ英学源流上の重要な位置を占めるものと考えられる」(528 頁)とある。またその一例として、慶応元年に創設された長州藩の海軍学校が、すでにウェブスター辞典のポケット版(図 3)を所蔵していたことを挙げられよう。ポケット版という用途を鑑みれば、それを学内外で携帯して用いるだけの英学への取組があったことの傍証になるものと考えられる。なお、同資料に



については、先方からの希望により所蔵先を明記していないことを断っておきたい。

- 62) 武田勘治『久坂玄瑞』(マツノ書店復刻版, 1998 年), 321 頁、青山忠正『高杉晋作と奇兵隊』(吉川弘文館, 2007 年), 133 頁。
- 63) 奇兵隊の創設事情については、青山前掲書参照(139-143 頁)。
- 64) 『定本奇兵隊日記』上 (マツノ書店, 1998 年, 11-30 頁)。
- 65) 「異賊防禦御手当沙汰控」(『山口県史』史料編・幕末維新 6, 52 頁)。
- 66) 前掲『定本奇兵隊日記』(47 頁)。
- 67) 同上。
- 68) 前掲「異賊防禦御手当沙汰控」(67 頁)。
- 69) 同上, 106 頁。
- 70) 同上, 226 頁。
- 71) 『渡辺翁』, 79-80 頁。
- 72) 前掲『修訂防長回天史』第三編下, 487 頁。
- 73) 同上, 484 頁。文久 2 年 3 月時点で博習堂の居寮生は 20 名程度とあるが、この段階ではまだ天野の名は見えない。
- 74) 小川前掲書, 103-116 頁。
- 75) 妻木忠太『木戸松菊公逸事』(マツノ書店復刻版, 2015 年) に、「渡辺蒿蔵氏の談」(大正 7 年 10 月 23 日) として、「私は坪井航三(後ち海軍中将)等が、蘭学を修めてゐるのに、独り英語の字書を引いて、海軍のことを研究した」(543 頁) と見える。
- 76) 小川前掲書, 108-112 頁。
- 77) 同上, 154 頁。
- 78) 『渡辺翁』, 84 頁。
- 79) 「文武御興隆明倫館兵学校其外伺書」参(山口県文書館蔵)。
- 80) 注 59 に同じ。
- 81) 小川前掲書, 156 頁。
- 82) 「海軍学校諸控」(山口県文書館蔵)。川口雅昭「三田尻海軍学校の教育」(『広島大学教育学部紀要第 1 部』27, 1978 年) は、海軍学校の設立に干城隊が関係していることを早くから指摘している。
- 83) 小川前掲書, 155-157 頁。
- 84) 『渡辺翁』, 84 頁。
- 85) 前掲『高杉晋作史料』第一巻, 362 頁。
- 86) 同上, 364 頁。
- 87) 同上, 365 頁。
- 88) 三宅紹宣「幕長戦争における高杉晋作の幕府軍艦奇襲の背景」(『山口県地方史研究』第 110 号, 2013 年)。
- 89) 前掲『修訂防長回天史』第五編中, 490-495 頁。
- 90) 「慶応 3 年正月 6 日天野清三郎宛書簡」(『木戸孝允文書』二, 東京大学出版会, 2003 年, 258-259 頁)。

- 91)海原前掲書『松下村塾の明治維新』参照(249-255頁)。同書に拠れば、松陰が江戸を送られる際に飯田宛に詩を贈っていることを挙げ、「群童中に際立ったその才能に期することがあった」(250頁)、また正確な時期は分からないとしながらも、文久3年秋以降の大村益次郎による山口兵学寮普門寺塾、あるいは三兵塾や三兵学科塾における会読の成績では、「飯田が一番よく出来る生徒であり、海外留学生に選ばれる素地は十分にあった」(251頁)とある。
- 92)前掲『修訂防長回天史』第五編下,324頁。
- 93)海原前掲書『松下村塾の明治維新』参照(178-184頁)。15歳で松門に入り、その後干城隊、御楯隊に参加し、軍監の地位にあった。慶応2年には兵学修業のため長崎へ派遣されている。
- 94)中西洋『日本近代化の基礎過程—長崎造船所とその労使関係—』中(東京大学出版会,1983年),406頁。
- 95)『渡辺翁』,88頁。
- 96)『木戸孝允関係文書』1(東京大学出版会,2005年),142-143頁。
- 97)河瀬真孝は、功山寺挙兵などで高杉晋作と行動を共にし、遊撃隊総督を務め、第二次幕長戦争でも活躍した。奇兵隊以来のつながりもあり、天野とも親しい間柄であったと思われる。元々イギリス行きを希望していた天野がアメリカに発った慶応3年、同じく木戸の周旋により河瀬が、毛利親直、福原芳山とともにイギリスへ留学しており、限りある財政の中で藩として留学生の訪地を分散させようとしていた意図も窺える。
- 98)『渡辺翁』,89頁。
- 99)藤井泰「山尾庸三とユニバーシティ・カレッジ」(『英学史研究』22,1989年)。
- 100)北政巳『国際日本を拓いた人々』(同文館,1984年),34-35頁。
- 101)宮地ゆう『密航留学生「長州ファイブ」を追って』(「萩ものがたり」6,2005年),50-52頁。
- 102)井上琢智「幕末・明治・大正期イギリス日本人留学生資料(1)」(『経済学論究』56(4),2003年)。
- 103)『渡辺翁』に、「エジンバラは蘇格蘭の古都で山岳秀麗を以て名高い所ではありますが、翁は此处では造船所の一職工となつて、機械油で汚れた労働服を着て、汗を流してハンマーを振ひ、勤労を通じての実地体験苦を嘗めて、実学実行の村塾教育の真髄に触れられました」(90頁)とあり、文脈上エジンバラの造船所と取れるが実際にはグラスゴーであろう。
- 104)『渡辺翁』,90頁。
- 105)前掲『木戸孝允関係文書』1,145頁。
- 106)「明治6年正月24日天野清三郎宛書簡」(前掲『木戸孝允文書』五,2-3頁)。
- 107)明治6年3月、「学制」において文部省は海外留学生に関する規則を制定し、官選と私願とに分けそれらはすべて文部省の管轄にはいるものとした。当時、官費生250人、私費生123人計373人の留学生があったとされるが(「文部省第一年報」)、これらの多くは天野も含め、従前の各藩からの派遣であり、新規則の施行に伴い、同年12月にはすべての海外留学生を帰国させるに至った。『学制百年史』(文部省,1972年,230-231頁)参照。
- 108)中西前掲書(408頁)に拠れば、明治7年5月に長崎造船所長として赴任した「製作助」(官員6等)を皮切りに、10年1月「少書記官」(同)、12年4月「少技長」(官員から「技

術」6等への格付け替え)、13年12月「権大技長」(5等)、16年9月「長崎造船局長」となり、17年7月の三菱貸与時までその職を務めた。

109)中西前掲書,408頁。

110)「明治8年1月1日渡辺蒿蔵宛書簡」(前掲『木戸孝允文書』六,1-2頁)は、木戸が渡辺に満珠丸なる蒸気船の精度の検分を請う内容であり、山尾庸三に相談してもこの件は渡辺に聞くようにあったと見える。

111)大正14年に刊行された『明治工業史造船篇』(『明治後期産業発達史資料』第223巻所収,龍溪書舎,1994年,復刻版)によれば、「明治三年より十七年に至る十四年間に於いて、内地新造の登簿木船は約八百九隻あり。汽船はその三分の一を占むれど、之を噸数にて表示すれば、総噸数六万六千余噸に対し僅かに一万六千余噸、即ち四分の一を占むるに過ぎざりき。わが国は大木船を建造すべき良材に乏しきのみならず、欧州諸国に於いてはその当時木船既に衰微して鉄船の時代なりければ、これ等の内地新造木船は皆五百噸を超えざる小形のものにして、何等特に観るべきものなかりき。此の間に在りて長崎工作分局が数年を費して建造し、十六年三月進水したる木造汽船「小菅」丸は、未曾有の大船にして、その構造設備の完全なること、本邦建立の木船中最も顕著なるものなり」(165頁)と評価されている。

112)『三菱長崎造船所史』第1(三菱造船株式会社長崎造船所職工課編,昭和3年)に拠れば、明治14年7月から翌15年6月の間について、「本期は海運及鉱業の旺盛に随ひ船舶並に機械の製修とも其数を増加し、随つて營業收入も当局創業以来未曾有の額に上れり、立神修船場に於ては内国船十二隻、外国船十二隻、合計二十四隻、噸数總計三萬一千八百九十八噸六〇なり」(32頁)とある。

113)この辺りの経緯は、中西前掲書「第3章 工部省長崎造船所の盛衰:1871~84年」の「第4節 官営工業の終結」(616-654頁)に詳しい。

114)『渡辺翁』,92-93頁。

115)例えば、Wikipediaにおける「渡辺蒿蔵」の記述では、49歳に退職後、日本郵船社長を務めたとあるが、『日本郵船株式会社五十年史』(1935年)、『日本郵船株式会社百年史』(1988年)、『日本郵船百年史資料』(1988年)の歴代役員の項に渡辺蒿蔵の名前は確認できず、そうした事実はなかったことを指摘できる。

116)渡辺の村塾保存会への参加から後の松陰神社創建までの経緯については、『渡辺翁』(98-106頁)における後人による座談会の内容から窺える。なお、本稿の図7に使用した長州ファイブの写真も渡辺蒿蔵により保存されていたものである。